窓際地味子の秘密

－図書室での入れ替わり－



窓際地味子の秘密
―図書室での入れ替わり―

少し開いた窓からは心地良いそよ風が教室内へと吹いている。その風に揺らめくカーテンはワルツを踊るようにリズミカルで、一定のペースを保っていた。

明るい朝の陽の光が差し込む――

その窓際、教室の一番奥の席に東雲清香（しののめきよか）は静かに本を読んでいた。美しい黒髪には太陽の光が反射して艶が生き生きと輝く。ページを捲る細長い指は、カーテンの舞うリズムに合わせて指揮棒を振っているようにも見えた。

無表情で、ジッと本だけを見つめる。いつも自分の席で過ごし、放課後は図書委員の仕事に向かう。誰かと話すことは少ない。

けれど、話しかけたら気さくに返事をしてくれる。表情は少ないが、時折花が咲いたような笑顔を見せてくれる。その、一瞬の開花に俺は癒やされるのだ。地味、と言えば片付いてしまうかもしれない。

しかし――東雲さんにはそれだけでは語れない魅力が多くある。川のように流れる清らかで長い黒髪、硬そうで柔らかい表情、丸い眼鏡、少し丈の長いスカート、澄んだ瞳。その全てが美しく、まさに正統派美少女だ。

その俺はと言うと――彼女の隣の席に座る一般的な男子高校二年生、帰宅部部員の山田貴紀（やまだたかのり）である。一年の頃はバスケ部に所属していたが、馴染めず退部してしまった。

クラスに友達は数人いるが、活発に集まるわけでは無い。休み時間にはちょこちょこ話し、帰りも途中までは一緒に帰るくらいだ。それぞれ部活があったりする都合上、毎日一緒に帰る事はない。

今日も一人で帰宅する予定であった――

＊　＊

帰りのホームルームが終わる。各々のクラスメイトは委員会や部活に向かうため廊下を急ぐ――

廊下は夕陽によって茜色に染まっている。壁も扉も床も、統一された色に塗られ、俺自身もその空間に溶け込んでいるようだった。

「……そうだ、図書室へ行こう。」

旅行に行くようなキャッチフレーズを呟き、夕暮れの校舎内を移動する。案の定、今日は皆部活があり、帰りは一人になる。それが退屈で、図書室へ向かうことにした。

何より東雲さんが図書室にいると思うと、つい足がそっちの方向を向いてしまう。これまでにも行く機会はあったが、普段から本を読まない俺は行く目的が無かった。

いや、訂正しよう――彼女に会うことが本当の目的であるが、その為の偽りの目的を作ることができなかったのだ。

しかし、今日の日本史の授業で幕末のことを勉強し、より細かく知りたいと思った。特に、鳥羽伏見の戦い以降の旧幕府軍と新政府軍の戦いは興味深く感じた。どのような戦いをしたのか、どのような攻防を繰り広げたのか気になった。

そのために、幕末関連の本が読みたいと思った。ここまで明確に本を読みたいと思った事はない。それに――具体的な目的があれば東雲さんと話すキッカケや話題作りになると思った。フワッとしたやり取りだと会話が途切れてしまうかもしれない。きっと彼女は優しく受け入れてくれるだろうけど、気まずい雰囲気にはしたくない。

……ここは、確固たる目的と話題を装備して行こうと決めたのだ。

少し緊張する。普段教室で顔を合わせるとは違う、夕方というノスタルジーなシチュエーションに、図書室という静寂の空間。クラスの騒がしさが全く無い、誰も居なければ二人きりの世界になる。

向かう足取りはややペースが落ち、廊下を行き来する他の生徒に追い越される。夕陽によって伸ばされた影が俺の心を蝕むように、歩幅を合わせて追従して来る。

「……何緊張してんだろ。普段通りの俺になれよ！」

頬を軽く叩き喝を入れる。

別に告白をするわけでは無い。まだ、流石にそれは早く過ぎる。あくまでも距離を縮めるためのキッカケを作るんだ。

気合いを入れ直し、図書室へと急いだ――

＊　＊

「し、失礼しまーす。」

〝ギギギ……ッ〟と少し重たい扉を開ける。通い慣れていないため、職員室に入るような感じで入ってしまう。

「……ってあれ、誰もいないじゃん。」

図書室は夕陽が差し込み茜色に色付いていた。傾き始めた陽射しによってできた影と茜色による綺麗なコントラストを描いている。その光景は――何か青春が始まりそうな雰囲気を漂わす。

けれど、そこに居るはずの彼女が居ない。広いフロア内をいくら見渡してもその姿が無い。受付カウンターには今日の担当として〝東雲清香〟と名札が掲示されているから、存在はしている筈だ。……所在が不明なだけで。

一番の目的だった東雲さんが居ないことに落胆をしたが、話のキッカケのためにも、幕末に関する本を探して借りたい。そ

う思った。

「……それで、幕末関連はどこだ？」

ズラリと並んだ本棚。ある程度はジャンル別に納められているとは思うが、どこから探せば良いものか。何か、ジャンルごとの蔵書場所が一覧になった分布図がある筈だ。それを探したかった。

しかし――探すことに慣れていないためか時間がかかる。上を見上げ、下を見下ろし、首も疲れる。そもそも蔵書場所の一覧なら受付にあるのでは無いか、と思いもう一度受付カウンターに近づく。

『ぃ……んっ♡あっ……♡』

すると……どこからか声が聞こえた気がする。

（ん？誰かいる……？）

受付には東雲さんの名札のみ。

一応、探していた分布図を見つける事はできたが、東雲さんがいるなら直接聞きたい。そう思った。

けれども、その一瞬聞こえたように思えた声はその後は聞こえなかった。

（まあ、自分で探すか。）

分布図を見たら奥の方に日本史コーナーがあり、そこにあるようだ。俺はそこに向かい、お目当ての本を探す。無限に続く本のトンネルを通過し、織田信長や土方歳三が待つ日本史の世界へと辿り着いた。

幕末関連の本は多く蔵書されており、手書きのポップでわかりやすく区分けされていた。人物ごと、年代ごと、新撰組特集など初心者に優しい配慮がされていた。

……この字、もしかしたら東雲さんか？

手書きポップの字に見覚えがあった。教室で見たことある、確かあれは東雲さんのはず。黒板に書いていた字、日直日誌に

あった字、チラッと隣を見た時に彼女がノートに記していた字、それらに酷似していた。

「東雲さん、幕末オタクか……？」

もし、そうであれば是非とも話したい。きっと盛り上がるだろうし、知らない事を教えてもらいたい。この場に居ないことが本当に惜しい。今すぐにでも語り合いたいのに。

そう思った。その時だ――

『あ……んんっ♡あっ♡あぁぁぁ……っ！』

先程の比ではない、ハッキリと声が聞こえた。

受付カウンターの奥、図書室の隣の書庫からだ。

高い声。女の子の悲鳴のような。

……まさか、東雲さんに何かあったのでは？

俺は気づいた時には受付に駆け寄り、奥の書庫へと繋がる扉に手を掛けていた。上の表札にも書庫と掲げられているから間違いない。

ドアノブを捻ると簡単に回すことができた。どうやら鍵は掛かっていないようだ。

「東雲さん！どうかしたの！？」

俺は勢いよくドアを開け、書庫の中へと入る。

そこには――

「……え？」

「はあ……♡はあ……♡はへ……？」

確かに東雲さんは居た。

顔を紅潮させ、汗だくになり、息を切らしている。その表情は恍惚としている。

見たくて見た訳では無いが、スカートをたくし上げて椅子に座り、お股を開いてショーツの間に指を突っ込んでいた。

ああ……直感ですぐ分かった。

オナニーをしていたのだと。

まるで時が止まったようだった。お互いに瞬時に理解ができなかった。しかし――その止まった時は再び動き出す。

「し、東雲、さん……？」

「え……あ、その……み、見ないでえええええ！！」

「ちょっ……！危ないって！！」

彼女は顔を隠しながら取り乱し、椅子から勢いよく体起こして逃げようとする。しかし、余りにも勢いがよかった為か、体

勢が崩れる。足がもつれ、大きく体が傾いた。

……まるで世界がスローモーションで再生されているようだった。

「た、田中くん……っ！」

「東雲さん……！」

東雲さんが俺に向かって倒れてくる。ここで俺が逃げたら彼女は硬い床に叩きつけられてしまう。ならば――俺が下敷きになってクッションになろう。

瞬時にそう思い、体勢の崩れた東雲さんを受け止める。そして、そのまま二人で床に倒れ込んだ。

「ごめんね……田中くん……」

倒れる刹那、その一言が聞こえたのを最後に、俺たちはしばらく気を失ってしまっていた……

＊　＊

あれから、どれだけの時間が経っただろうか――

外から差し込む夕陽は僅かになり、辺りは夜の闇によって支配され始めていた。窓の向こうには太陽の姿は無く、空に残った最後の茜色が寂しそうにしているように思えた。

「んん……。」

少しずつ意識を取り戻す。

確か、倒れてきた東雲さんの下敷きになったはずだ。

「あれ、床が見える……？」

あの時、俺は仰向けで倒れた。そこで意識を失い、その上には東雲さんが乗っかっているからうつ伏せにはなれない、そのはずだ。

「……って、あれ！？目の前に俺がいる！！って、声が高い！？どうなってんだ！？」

喉を触る。そこにはあったはずの喉仏が無い。

頬が擽ったい。触れるとそこには髪がある。長く、滑からな髪があった。

顔には二つのレンズと、耳には眼鏡フレームが掛かっている。

胸が締め付けられる。下を見るとそこには二つの山が形成されている。制服は男子のものでは無くセーラー服になっている。胸元には赤いリボンが目立つ。

太もも同士が重なる。胸の下方にはズボンでは無くスカートが見える。膝の少し下まで丈のある他の女子よりも控えめな長さだ。サラサラとした肌触りが膝下までを包み込む。

おかしい。全てがおかしい。

これではまるで――

「東雲さんと入れ替わった……のか……？」

目の前は俺。そして、この長い髪、高い声、眼鏡、服装。そう思うしか無い。非現実的だが受け止めるしか無い。でないと説明ができない。

……どこかに鏡は無いだろうか？念の為姿を確認したい。

辺りを見渡すと、壁に小さな鏡が取り付けられていた。恐る恐る覗き込む。そこには――

「す、すごい。本当に、東雲さんになってる。」

入れ替わったことに間違いは無かった。隣の席にいる、無表情だけど本当は笑顔の素敵な東雲清香さんがそこにはいたのだ。

「ゆ、夢じゃないよな？」

頬をつねる。痛みはすぐにやって来た。

「……痛てて！これは夢じゃ無さそうだな！」

少し頬が赤くなってしまう。咄嗟に髪で頬を隠した。

髪からはとても良い香りが漂って来る。シャンプーだと思われる、甘くてフローラルな香り。きっと、俺が同じシャンプーを使っても再現はできないだろう。

「てか、俺というか東雲さん？起きないな……」

自分自身を起こすのは変な感じではあるが、それでも起こすしか選択肢は無いと思い、揺さぶりながら声をかける。

「おーい。東雲さん？大変なことが起きたよう。」

「んん……ん。」

「ヤバイよー、俺たち入れ替わっちゃったよー。」

「んん……ん？」

少し反応がある。そろそろ起きるかもしれない。

「起きてー！大変なんだよー！」

「ん、んんー？？あれ……私……？」

「目が覚めた？ヤバいよ、俺たち入れ替わったみたいで……。」

「入れ替わった……って何？……え？なんか声が低いよ？」

東雲さんも気づき始めたようだ。

まずはこの現状を受け入れてもらわないといけない。

「そうなんだよ！俺が、山田貴紀が東雲さんになって、東雲さんが俺になっているんだよ！！」

「え、嘘？……って、私が目の前にいる！？なんでなんでええええ！？」

「待って！落ち着いて！また転んじゃうから！！」

東雲さんを落ち着かせるため、両肩を持って動きを止める。しかし、今は俺の体は彼女のもの。目の前の男の体を止めるのは少し難儀だった。

――なんとかこの状況を説明し、本来はあり得ないことではあるが、お互いの体を確認し合い、入れ替わったことを受け入れてもらった。

「……まあ、そんな感じ。きっと東雲さんが倒れて一緒に転んだ時に入れ替わったんじゃないかなぁ。それにしても、話せば結構冷静になれるんだね。」

「先程は二回も取り乱してしまって申し訳ございません……。振り返るだけでとても恥ずかしい……。」

目の前の俺……と言うか東雲さんは顔を真っ赤にして俯き、取り乱したことを後悔している。外見は俺のはずなのに妙にかわいい。あの中に居る素の東雲清香が見え隠れし、女の子らしさを演出していた。

ただ、あのオナニーをしていた事だけは敢えて触れなかった。いや、触れる事などできない。何故していたかは気になるけど、それを聞くのはかなりの勇気が必要だった。……ここは、忘れるのが一番だろう。

「それでさ、これからどうしようね。」
「本当に……どうしようね……。」

わからない。戻れるのか、戻れないのか。けれど、こういった話は漫画やアニメで見たことある。大体の場合は同じキッカケで戻れたはずだ。

「例えば、もう一度ぶつかってみるのはどう?なんかさ、アニメとかであるじゃん?もう一度ぶつかって戻る演出とか。」
「あー、そうだね。でも痛いのは嫌だなあ……。」
「そっかあ……。」

確かに痛い思いをした。加えて気を失った。
もう一度それを経験するのは気が引ける。

「じゃあ、どうしよっか。」

「試しに、それぞれの家に帰ってみない？きっと今の体のまま帰っても信じてもらえないだろうし。一応、お互いの親には今日は疲れたからあんまり話せないって予防線張ってさ。」

悪くない提案だった。俺が東雲さんの姿で家に帰っても家族は信じないだろう。まあ、時間をかけて説明すれば良いのだろうけど、それは少し面倒である。

「うん、悪くないかも。それじゃあそっちの親に連絡よろしく。俺もメッセージ送っておくから。」

「ありがとう！あとさ、私たちの連絡先も交換しよ。何かあった時には必要だし。」

「そうしよう。なんか、東雲さんテンション高い？」

「べ、別に！いつも通り、だよ？」

「そっか。まあ、いいんだけどさ。」

お互いにメッセージアプリの連絡先を交換する。東雲さんは可愛らしい黒いリボンのアイコンだ。それに対して俺は夕焼け空。まあ……無難だ。

それに加えて、お互いの自宅の場所や家族構成について確認し合った。必要最低限の情報は出し合って不自然な振る舞いが

無いように努めた。ここまでやって不測の事態が起きたら仕方ない。それくらいまで詰めておいた。

「あと、これ今更なんだけど。実は今日図書室開いているの5時までなんだよね。……だから、油断してた。もう人来ないと思って。」

「あ……そうだったんだ。ごめん、知らなかった。」

「ううん、いいの。……私が悪いんだし。」

その一言に返せる言葉を持ち合わせていなかった。それに、あの時のことを掘り返す訳にもいかないと思い、敢えて返事はしなかった。

「ま、まあ。これでお互いに情報を出し合ったし、夜も深まってしまうし、それぞれの家に行きますか。」

「……そうだね、今日は解散だね。また、明日教室で。」

「うん、そろそろ出よっか。」

外はもう夜の闇に包まれている。書庫の窓から見える景色は既に月明かりが昇る夜の風景に変わっていた。夕暮れの茜色は

とうに消え去っていた。

ｷｷﾞｷﾞ……ｯｪと扉を開け、廊下に出る。東雲さんの体で開ける扉は、最初入った時よりも重く、この華奢な体に全体重を乗せるようにして開いた。

廊下の外も夜の世界に覆われており、天井に等間隔で付いている蛍光灯が怪しい雰囲気で輝いている。

お互いに色々話してしまったため、廊下を往く道中に会話がほとんどなかった。別に気まずいという訳ではなかったが、この夜の学校の雰囲気に押し潰されてしまいそうな思いだった。……気にし過ぎかもしれないが。

そして――俺が何も会話が無いまま下駄箱まで辿り着いた。この歩いている間、髪が跳ねて良い香りが漂い、スカートが揺らめいて何度もサラサラとした触感が太ももと膝に当たった。

足の運びは普段通りなのにいつもより進みが悪く、胸の締め付けられる感じ、つまりはブラジャーを身に付けている感覚に違和感しかなかった。

何もかもが初めての感覚で、女の子になったことを嫌でも実感させられた。

「私の下駄箱はここ。田中くんのは？」
「あ、ああ。あそこの上から二番目。」
「……なんか、考えてた？」
「色々考えてた。女の子の体に全然慣れなくて……。スカートとか髪とか……。」

靴を履きながらありのままのことを話す。それが事実であるから誤魔化す必要も無いだろう。履き慣れないローファーが不規則なリズムで足音を鳴らしている。

「まあ、そうだよね。私も慣れないなあ。こんなに髪が短かったことは無いし、普段の私服もスカートやワンピースだからズボンなのが変な感じ。あと、身長高いからいつもと少し景色違う。」
「私服もスカートなんだ。その……かわいいね。」

何故かそこに惹かれてしまった。
また少しだけ東雲さんの素を覗けたようだった。

「え……っ！そんなかわいいなんて……。別にぃ、そんな事は無いと思うけどなぁ。」
「あはは、東雲さんって照れるとこんなにかわいいんだね。」
「もう、田中くんのイジワル！それに、照れてないし……！」

笑う姿は俺だ。けれど、その中身は普段凛とした東雲さんが時折見せる笑顔そのものだった。正直、ここまで打ち解けることができるとは思わなかった。しかもこんな形で。少しの時間だけど、青春をしている気がしてとても楽しかった。

「それじゃあ、また明日。気をつけて帰ってね。」
「うん、ありがとう。今日は巻き込んでしまって本当にごめんなさい。親には言ってあるから最低限の関わりで大丈夫だと思う。何か問題があれば連絡してね。それと……。」

東雲さんは何か言いかける――

「ん？どうかした？」

「ううん！何でもないの。それじゃあ、また明日教室で。それと、放課後はまた図書室の隣に来て欲しいな。教室でも最低限で。普段通りに過ごそうね。」

「わかった、色々配慮ありがとう。また明日、じゃあね。」

「うん、バイバイ。」

校門を出ると、俺たちは反対方向に別れた。教え合った自宅は、完全に真逆の方向にあったからだ。幸い、お互いそこまで遠い距離ではなかったから歩いて帰ることができる。

慣れないロングヘアとスカートを揺らしながら、東雲さんの家路についた。髪が夜風に馴染み、スカートの内側まで少し冷たい風を届けてきた。女の子のパンツ――ショーツは通気性が抜群で、お股の奥まで冷えるようだった。

それに……言わないようにしていたが、ずっと湿っている感覚があった。きっとオナニーをしていた名残だろうか。この湿り気に夜風が当たって冷たさを助長している。

一体――何をオカズにオナニーをしていたのだろう。俺はこの疑問を夜空に浮かぶ満月にぶつけていた。

＊　＊

「ただいまー。」

知らない住宅街、知らない家だった。けれど、表の表札には東雲とあり、そこは間違い無く東雲清香さんの家であった。

玄関に入り、靴を脱ぐ。俺の家とは全く異なる香り。けれど、制服から漂う香りと一致するため、ここが今の自分の家なのだと思うしか無かった。

「……お帰りなさい、清香。遅かったね。委員会の仕事なんだっけ？」

「うん、本の整理してたら遅くなっちゃった。」

「お疲れ様。ご飯できてるから食べちゃいなさい。お風呂ももう直ぐで沸くから先に入って、今日はゆっくり休むんだよ。」

「ありがとう、お母さん。」

全て打ち合わせ通りだった。

滞りなく親とのやり取りができた。

普段、俺は母親のことは〝母さん〟と呼ぶことが多いため、今日は気をつけて〝お〟を強調しながらゆっくり呼ぶことに専念した。お陰で違和感無くやり過ごせたようだ。

「もう、用意してるから食べちゃって。」

「はーい、いただきます。」

リビングに入ると香辛料のスパイシーな香りが漂ってきた。いつもの東雲さんの席には既に麻婆豆腐が配膳されている。その隣にはワカメとネギのスープと小さい茶碗に少量の白米。中央には春雨のサラダが並んでいた。

「……今日は中華だね。」

「うん、そうよー。春雨と豆腐が安かったからまとめて使っちゃた。さあ、食べて食べて。」

「はーい。」

手を合わせ、一口麻婆豆腐を口へと運ぶ――

（んんっ……！）

口の中で広がったのは、少し濃く、程よく辛い、香辛料と甜麺醤の刺激と深みだった。できたての熱々の麻婆豆腐は非常に美味しく、病みつきになる味だった。

数口食べると口の中が濃くなる。それを春雨サラダ、スープ、白米で中和する。額に汗をじんわりかき、ハンカチで拭き取り冷えたお茶を飲む。

「……美味しい。」

つい言葉が溢れてしまうほどの美味しさだった。入れ替わったことを悟られないように最低限の会話しかしないつもりだった。その緊張をほぐすかのように、言葉が自然に出ていた。

自分の家で出てくるご飯よりもこっちの方が美味しいくらいだ。まるで中華料理屋に来たようだった。本格的な味、レトルトや完成品を使ったわけでは無い、きっと全て手作りなのだろう。

「どう、美味しかった？」

お母さんは嬉しそうな表情で聞いてくる。

余程自信があったのだろう。

「うん、すごく美味しい。中華料理屋さんみたい。」

「ありがとうー！やっぱりイチから作った方が美味しくなるみたいだねー。」

「へえ、そうなんだ。」

あまり話し過ぎるとボロが出てしまう。

自然な会話を心掛け、余計なことは言わない。

……これも打ち合わせ通りだ。

〝もう直ぐ、お風呂が沸きます〟

〝♪～〟

お風呂場の方からお風呂の沸いたアナウンスがリビングに響いた。俺の緊張とは裏腹に軽快な音楽だった。

「さあ、食べて食べて！そうしたら一番風呂行ってきなさい！」

「はーい。わかりました。」

俺は夢中で食べ進め、あっという間に食べ終えた。

「ごちそうさまでした。」

「はい、お粗末さまでした。」

食器を流し台に運び、リビングを出る。そして――二階の東雲さん、いや清香さんの部屋に向かう。

階段をゆっくり登る。自分の家では駆け足で登り注意されることがあるから、ここでも入念に確認しながら階段を上がっていく。

階段を上がって右に曲がる。すると、そこには【清香の部屋】と表札が掲げられていた。間違いない、ここだな。

中に入ると、そこにはシンプルだけど整った如何にも清香さんらしい空間があった。壁紙は白で特に模様は無い。けれど――掛かってる時計やカーテン、床のカーペットは水色や淡いピンクが散りばめられており、さりげない可愛らしいを演出していた。

何より、一段と増した清香さんの香りだ。香水や制汗剤でなはい、シャンプーや洗濯洗剤によるのだろうか、甘くて優しい香りが空間一体を包み込んでいた。まるで、春の暖かさの中を歩いているようだった。

「それで、パジャマはここかな……？」

淡いピンクの布団の上に、几帳面に畳まれたシンプルな水色のパジャマが置いてあった。そして、その上にはインナーシャツと下着、つまりはブラジャーとショーツまでがご丁寧に置かれていた。

「っ……！深く意識はしていなかったけど、この後俺、裸になってお風呂に入るんだよな……？しかも、ブ、ブラジャーを付けるんだよな……？」

忘れていた緊張を思い出す。
背筋に汗を感じる。
この締め付け感を一度外し、入浴と共にその裸体を晒す。――つまりは、清香さんの裸を見なければならない。そうでもしなければ入浴はできない。
「……覚悟を決めよう。お風呂に入らない訳にはいかないよな。」
……とりあえず、制服を脱ごう。
スカートのホックを外しファスナーを下ろす。白と淡いピンク色のショーツが見える。そして、清香さんの細くて白い、華奢な足が露わになる。
滑からで、きめ細かい、女の子の足だ。

「すごく、綺麗だ……。」

正直、スカート丈を長くしていることが勿体無いくらいの、モデルのような足だ。けれど、清香さんの性格的に足を出したく無いのだろう。

次にセーラー服を脱ぐ――

同じようにファスナーを下ろし、腕を袖から外す。メガネを外して机の上に置き、スポンッと頭から抜き去る。……思ったより簡単に脱ぐことができた。そうして、インナー、下着、くつ下だけの姿になった。……まさか、清香さんのこんな姿を見ることになるとは想像もしていなかった。

「……考えても仕方ない。お風呂に行こう。」

脱いだ制服を壁に掛かっているハンガーに掛ける。自分のものでは無いからいつも以上に丁寧に扱う。明日も、これを着ることに違和感があるが、今は仕方ない。

パジャマとインナー類を持ってお風呂場に向かう。この家の見取り図は大体教えてもらったから、特に滞りなく辿り着いた。

脱衣所にて、くつ下、インナーを脱ぐ。鏡にはブラジャーとショーツだけの清香さんの姿が写し出される。

「思ったよりも、胸大きな……。」

無意識に内股になる――

清香さんは主張させていないが、意外と胸が大きい。きっと彼女の性格ならここを強調することはないだろうけど。妙に締め付けが強いのはこの大きさを隠すためなのだろうか。

その乳房を封印している拘束具を、今外す――

「おお……。」

ブラジャーのホックを外し、紐を脱ぎ去る。その瞬間――大きな乳房が〝たゆん〟と揺れ露わになる。華奢な体では支え切れ

ないと思えたその揺れの中心には、可愛らしいピンクの乳首が主張していた。

「凄いな、マジで大きい……。」

思わず、両手で包むように触れる。

想像よりも柔らかく、サラサラとしていた。

「すごい……俺、いま清香さんのおっぱい触ってる……。」

ペニスが付いていたらきっと勃起してた。

それどころか我慢汁くらいまで出てたに違いない。

「あ……っ！んんん……っ！？」

乳首に指が触れた。

その瞬間、体に電撃のようなものが走る。
思わず声が出てしまった。……とてもえっちな声が。
「び、びっくりした……。え、なんか……お股が湿ってきた気がする……。」
所謂、濡れたという状況だろう。
清香さんの体は思ったよりも敏感なのだ。
……丁寧に扱わないと――すぐイってしまいそうだ。
そう言えば、入れ替わった直後もお股に濡れた感覚がしばらく残ってた。オナニーした後だから仕方ないのだけれど。ヌメヌメした感じが夜風に触れて冷たくなり、やがて消えていた。ある意味、スカートとショーツの通気性の良さに助けられたのだ。
「……何考えてんだか。お風呂入ろ。」

ショーツを脱ぎ、それも洗濯カゴに入れる。
脱ぎたての清香さんの衣類が重なる。

そしてタオルを持ち、お風呂に潜入する。鏡には全裸になった清香さんが揺れる湯気に纏われて妖艶に写っていた。
長い黒髪、白い肌、瞳、くびれた腰、華奢な手足、その全てが魅力的で学校の教室で本を読んでいる姿からは想像できない程、蠱惑的だった。……つまりは、めちゃくちゃエロかった。

「……おっぱいって本当に浮くんだな。」

そんな感想を抱き、湯船に体を沈めて疲れを癒した。


sample